

福島県磐梯町教育委員会 完了報告書

1. 調査研究概要

平成32年度から中学年において外国語活動、高学年においては教科としての外国語科が導入され、それに伴い3～6年生の総授業時数が年間35単位時間の増加となる。この時間を確保し、ねらいに向けて充実した授業としていくためには、家庭・地域・児童等の実態など様々な事柄を考慮し進めなければならない。

本町においては、平成16年度より小学校での英語教育を導入し、他市町村に先駆けて取り組んできた成果を生かし、平成32年度からの新学習指導要領完全実施に向けて、今年度（平成30年度）から外国語活動について先行実施することとした。そのため、昨年度は、児童及び教員の負担過重とならないようにするためのカリキュラム・マネジメント調査研究として、年間授業可能時数の洗い出し、学校行事等の精選、休み時間の一部短縮やモジュール学習を導入するための日課表の見直しなどを行い、教育課程を編成した。また、モジュール学習を行う国語、算数、外国語について、それぞれの年間指導計画を作成・整備し、今年度に備えた。

それによって今年度は、実践校（磐梯第一小学校・第二小学校）において、外国語活動・国語科・算数科の15分の短時間学習や60分授業を日常的に実践・研究し、公開授業研究会等を通して、新学習指導要領で目指す資質・能力を育むためのより効果的な授業及び教育課程の在り方を見出すために、次の4つの視点をもって調査研究を進めた。

- (1) モジュール学習に対応する「年間指導計画」「日課表」の運用と改善
- (2) 15分モジュール及び60分授業の実施と指導方法の工夫
- (3) 人的・物的な資源の整備と授業での効果的な活用
- (4) 評価を改善につなげる校内研修の活性化

その結果、次のような考察を得た。

- (1) 60分授業は、児童に対して発表の準備やICTを活用した調べ学習等にも時間を十分に与えることができ、さらに振り返りの時間を確保することもできるため、学習内容の定着及び深まりに効果がある。加えて、授業を実施した上での実感のある反省と改善ポイントを、年間指導計画に記入・蓄積し、次年度の年間指導計画の改善につなげるようにしたことはたいへん有効であった。
- (2) 日課表は固定されているのが望ましい。日によって、或いは学年によって生活リズムが変わるのは、児童の集中力を欠くことにつながってしまう。全学年あるいは3年生以上が一斉に60分授業を実施する機会を設定すれば、さらに学びを充実させることができるのではないかと。
- (3) 外国語活動・国語科・算数科において研究を進めたが、「総合的な学習の時間」を全学年同じ曜日の5校時または6校時に60分授業として取組むことも考えられるのではないかと。総合的な学習の時間を、週1回60分授業として実施することによって、体験的、探究的な活動を深めたり、新たな課題を見出したり、まとめたり発表したりする活動を充実させることができる。

(4) 児童がさらに主体的な学びを充実させるために、60分授業における「学習の見通しをもつ活動」「学習を振り返り、自己の成長や学習のよさに気付く活動」の在り方について研究実践を続けたい。

(年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	○研究内容及び計画についての共通理解のための研修会
5月	○各校での短時間学習、60分授業の実践及び検証
6月	○先進校視察
7月	○短時間学習、60分授業についての検討委員会での検証
8月	○授業公開のための準備
9月	○各校での短時間学習、60分授業の実践及び検証
10月	○授業公開（第一小学校）
11月	○授業公開（第二小学校）
12月	○短時間学習、60分授業についての検討委員会での検証
1月	○平成31年度教育課程の編成
2月	○研究報告書完成
3月	

2. 調査研究の内容

2-1 【磐梯第一小学校】

2-1-1 調査研究の内容

(1) 授業の進度に合わせ、火・水・木の1校時或いは月・水の5校時に60分授業を実施できる日課表を工夫し、年間指導計画に従って第5・6学年の外国語活動、及び第3～6学年の算数科において60分授業を実施した。

【実践例①】第5学年 外国語活動

《单元名：What time do you get up? (We Can! 1 Unit 4) 》

ア 60分授業設定の理由

・本校では、お互いに第二言語として学習している英語を使う動機付けとして、年間を通じて「スペイン」の同学年の子どもたちとの国際交流（メールのやり取り等）を行っている。本時は授業前半に学習した内容を用いてスペインの子どもたちに尋ねてみたいことを英語で作成し、実際にビデオレターとしてやりとりをする学習過程とした。そのために、質問事項の決定から動画撮影まで、時間を十分に確保したうえで取り組ませたいと考え、60分授業を位置付けた。

イ 60分授業の効果

・児童は、実際にスペインの子どもたちとのやり取りをすることに必要感と意欲を高め、自身の英語（発音）及びビデオレターの完成度を高めようとALTに伝わるかどうかを何度も確かめながら真剣・丁寧に取り組んだ。そのため、予想通りであるが、一連の活動に時間を要し、60分授業の意義と効果が高まった。

- ・特に外国語活動の時間に、本時で学習した学習内容（英語表現）を実践・活用するところまで高める授業をねらうには、60分授業はたいへん効果的である。



【実践例②】第3学年 算数科

《单元名：かけ算の筆算のしかたを考えよう》

ア 60分授業設定の理由

- ・単元の学習内容をしっかりと身に付けさせ、本単元で目指す資質・能力を育成するためには習熟・発展問題に取り組む時間を十分に確保することが重要と考えた。単元構想を計画し、適応問題の時間を60分授業で行い、段階的な問題を工夫することによって、児童が進んで学習することができると思った。

イ 60分授業の効果

- ・単元の学習が進むと、児童にはもっと問題を解いて力をつけたい、もっと難しい問題を解いてみたいという気持ちが芽生えることがある。これまでの45分の授業では、適応問題・発展学習を家庭学習につなげるなどの工夫をしてきたが、理解に個人差があることも多く、発展学習を家庭での学習とさせた場合に下位児童には放課後などの時間での個別指導も必要となっていた。60分授業であれば、個人差への対応もその場で個別指導につなげることもでき、定着のための十分な時間を確保することができた。
- ・今回の実践ではICT教材や具体物操作も理解を深めていく過程で有効だった。デジタル教科書を大きく提示し、アニメーション等で場面を動かすことで、文章だけではとらえられない問題場面の把握や思考の仕方を支援することができた。
- ・絵や図を描くこと等、これまでも様々な教材・教具を用いてきたが、60分授業の実施にあたっては特に、意欲と興味・関心を持続させ得る有効な教材や教具、学習課題を工夫することが重要である。



2-1-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

(子どもの視点から)

- 英語学習において、児童が授業で慣れ親しんだ英語表現を「実際に使ってみたい」と感じることもあるが、60分授業のプラス15分の時間のなかで実際に自らの言葉として活用・発信するまでに至る授業が実現できることは、児童にとって達成感と英語の有用性を実感できる意義深いことである。
- 算数科などにおいて、適応問題、発展学習を家庭学習に課すことがあるが、下位児童にとっては家庭で自分一人で取り組むことはなかなか困難なこともある。60分授業のプラス15分の時間に、相談できる友達や教師がいる環境のもとで適応問題に取り組むことができることは児童の意欲と安心感につながっていた。上位児童にとってもより多くの問題に接する時間を確保でき、定着を高めることができた。
- 60分授業は、児童の理解力に個人差があるなかで、どの子にも十分に考えるゆとりを持たせることができる。
- 十分に工夫を図った日課表ではあったが、60分授業を実施する場合は、実施のない学年との時間のずれが発生し、授業中に隣の学年は休み時間だったり、帰りの学活を行っていたりすることとなり、児童の中には落ち着かなくなるものも見られた。
- 日課表は固定されているのが望ましい。日によって、或いは学年によって生活リズムが変わるのは、児童の集中力を欠くことにつながってしまう。全学年あるいは3年生以上が一斉に60分授業を実施するような日課表及び教育課程を工夫できれば、さらに学びを深めることができると考える。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 60分授業実施により積み重ねた時間により、週1～2回5校時終了の日が取れることは、教師の教材研究や事務整理のための時間をとることができ、残業を減らすことにつながっている。
- プラス15分の意欲を持続させるために、学習課題や教材・教具等に普段以上の工夫を凝らす必要がある。特に授業開始後40分を過ぎる頃に、体感的に薄れてくる集中力或いは知的好奇心を一段高める何らかの「刺激」を工夫する必要があり、教師側の負担となる。
- 体験活動や調べ学習、作業等で実質45分で終業できないことが多い「総合的な学習の時間」を適切な日に全校一斉に60分授業として位置付ければ、教員の負担も多くなり、効果的なカリキュラム・マネジメントとなるのではないかと考えている。次年度以降の研究に引き継ぎたい。

(地域との関係の視点から)

- 15分モジュールや60分授業を実施することについて、地域は先進的な取組と理解していただき、学校行事やPTA活動の縮小についても協力的だった。
- 60分授業を定期的に繰り返すことは、児童にとって負担が大きいのではないかと心配する声もあった。実際の60分授業を保護者にも公開し、児童の姿を参観してもらうことで理解を得た。

2-1-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	校内現職研究委員会 全体会 (研究の方針と研究授業計画の確認)
5月	第1回研究授業及び事後研修会 (算数科)
6月	第2回研究授業及び事後研修会 (外国語活動)
7月	第3回研究授業及び事後研修会 (算数科)
8月	中間まとめと研究紀要作成
9月	第4回・第5回研究授業及び事後研修会 (算数科・外国語活動)
10月	学校公開
11月	校内現職研究委員会 全体会 (研究の成果と課題の確認)
12月	教育課程編成全体会 (次年度教育課程の編成方針の確認)
1月	教育課程編成作業
2月	研究報告書完成
3月	教育課程完成

2-2 【磐梯第二小学校】

2-2-1 調査研究の内容

(1) 5・6学年の国語科で60分授業、5・6学年の外国語活動で15分モジュールと60分授業を実施した。

【実践例①】第6学年 国語科

《単元名：町の未来をえがこう「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」》

ア 60分授業設定の理由

- ・自分たちが住む町の現状を理解し、他市町村での取組等を調査した上で、町の活性化を図るためにはどうしたらよいか考え、最終的にグループでまとめたコミュニティデザインを町役場職員、観光協会職員に伝えることを単元の目標とした。プレゼンテーションの前に、作成した資料の提示や発表の仕方を練り上げるためには十分な時間が必要であることから、60分授業を位置付けた。

イ 60分授業の効果

- ・資料がわかりやすいか、見やすいかなどを検討し、修正や手直しをするのに有効であった。
- ・練習の時間を十分に確保したことで、声の大きさや速さ、資料が見えやすくするための立ち位置の確認、資料の文字の大きさなどを修正することができた。
- ・目的意識が明確であったため、集中力を欠くことなく60分を有効に活用することができた。



【実践例②】第5学年 外国語活動

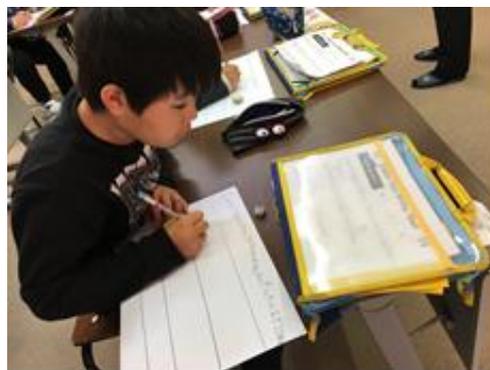
《単元名：I want to go to Italy. 行ってみたい国や地域》

ア 60分授業設定の理由

- ・海外に行ったことがある先生たちの話を聞いたり、外国の映像教材を見たりして外国への興味が高まった上で、自分の行ってみたい国や地域を紹介する。紹介した後、自分が行ってみたい国をポスターで紹介するという活動を通して、音声で十分に慣れ親しんだ表現を書くために十分な時間が必要であることから、60分授業を位置付けた。

イ 60分授業の効果

- ・音声での発表の前に、自分の発表する姿を映像で確認する時間を取り、表情やジェスチャー、声の大きさや速さなどを修正する場を設けたため、どの発表も充実したものとなった。
- ・紹介した国のポスター作成では、紹介したいという気持ちが持続し、意欲的に取り組むことができた。文字を書くのにテキストや辞書を引きながら時間を要したため、60分がちょうどよい時間となった。



【実践例③】第6学年 外国語活動

《単元名：(We Can! 2 Unit 3) He is famous. She is great. 人物紹介》

ア 15分モジュールの実践

- ・週28コマに入らないぶんを15分の朝の活動に位置付けた。モジュールで扱う内容は、短いスパンで繰り返して活動したほうが定着が図りやすい復習的な活動や、短時間で楽しくできるチャンツや歌などを中心に行った。

イ 15分モジュールの効果

- ・ねらいを明確にし、意欲付けができれば、集中力が持続しにくい児童も集中して活動に取り組むことができる。
- ・45分授業では時間が不十分だった活動を、再度15分モジュールで扱うことにより、表現に慣れ親しませることができた。
- ・前時の活動とのつながり、興味・関心の持続があれば、書く活動にも集中して取り組むことができる。



2-2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

(子どもの視点から)

- 外国語活動の15分モジュールで、45分授業で行った活動を再び行うことにより、英語表現に十分に慣れ親しむことができるようになった。
- 授業に集中できにくい児童にとっても、15分という短い時間での活動は、集中してできることが多かった。
- 60分授業は、国語科でも外国語活動でも発表の前の準備に十分な時間をかけることができるため、発表内容の質が高くなり、充実したものになった。
- 60分授業は、PCを用いての調べ学習、グラフやデータなど発表の補助資料の作成にゆとりを持って取り組むことができた。
- 活動時間が長くなっても、振り返りの時間が確保できるため、学んだことを整理したり、自分の学習の成果と課題を把握したりすることが十分にできた。
- 15分モジュールも60分授業も、授業のねらいが明確になっていないと効果が薄れてしまう。1つ1つの活動を何のためにやるのか、何ができるようになるのかを十分に把握する必要がある。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 週28コマでの実施は、5校時の日が2日あるため、会議や研修の時間、成績処理や事務仕事の時間が確保でき、勤務時間外の仕事の削減につながっている。
- 朝の15分モジュールの実施は、週28コマに収まらない9単位時間ぶんだけであるため、朝の時間に取り組んでいるドリル学習、読書、体力づくりなどの活動への大きな影響はなかった。

(地域との関係の視点から)

- 3年生以上の年間授業時数が35時間増に対する授業時数確保のため、15分モジュールや60分授業を実施することについては、保護者に理解していただくことができた。しかし、同時に学校行事を削減することについては、結果的には賛同いただいたが、反対する意見もあった。

2-2-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	第1回全体研究協議会(今年度の研究についての協議)
5月	第2回全体研究協議会(研究主題、研究の進め方について)
6月	第1回研究授業会、第3回全体協議会(国語科)
7月	第2回研究授業会、第4回全体協議会(国語科)
8月	第5回全体研究協議会(評価)
9月	第3回授業研究会、第5回全体協議会(国語科)
10月	磐梯第一小学校授業公開
11月	磐梯町教育研究会授業公開(国語科60分・外国語活動60分)
12月	第6回全体協議会(今年度のまとめについて)
1月	教育課程編成作業
2月	研究報告書の作成
3月	教育課程完成

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

(子供の視点から)

- 外国語活動の15分モジュールの活用は、日を置かず短期間に英語学習を繰り返すことができ、英語表現に十分に慣れ親しむことができる。また、15分という短い時間での学習は、集中力を維持して取り組むことができる。
- 学んだ英語表現を実際に自らの言葉として活用・発信するまで至る授業は、45分授業ではなかなか達成できないが、60分授業であればプラス15分の時間のなかで実現することができる。児童にとって達成感と英語の有用性を実感することができる。
- 算数科などにおいては、適応問題、発展学習を家庭学習へとまわすことなく、その時間内に、相談できる友達や教師がいるなかで適応問題に取り組むことができる。
- 60分授業は、児童の理解力に個人差があるなかで、ゆとりをもって課題解決に向き合うことができる。また、調べ学習やグラフやデータなど発表の補助資料の作成など発表の前の準備に十分な時間をかけることができるため、発表内容の質が高くなり、充実したものになる。さらに、振り返りの時間が確実に確保できるため、学んだことを整理したり、自分の学習の成果と課題を把握したりすることが十分にできる。
- 外国語活動・国語科・算数科以外の教科・領域においても60分授業の効果が期待される。例えば、総合的な学習の時間を、週1回60分授業として実施することによって、体験的、探究的な活動を深めたり、新たな課題を見出したり、まとめたり発表したりする活動を充実させることができる。
- 当該授業時間に60分授業を実施する学年と実施しない学年との時間のずれが発生し、授業中に隣の学年は休み時間だったり、帰りの学活を行っていたりすることとなり、児童の中には落ち着かなくなるものも見られる。全学年あるいは3学年以上が一斉に60分授業を実施するような日課表及び教育課程を工夫できれば、さらに学びを深めることができると考える。
- 15分モジュールも60分授業も、授業のねらいが明確になっていないと効果は薄れてしまう。1つ1つの活動を何のためにやるのか、何ができるようになるのかを十分に把握する必要がある。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 60分授業実施により積み重ねた時間により、週1～2回5校時終了の日が取れることは、教師の教材研究や事務整理の時間を保障することができ、残業時間を減らすことにつながっている。
- 体験活動や調べ学習、作業等で実質45分で終業できないことが多い「総合的な学習の時間」を適切な日に全校一斉に60分授業として位置付ければ、教員の負担も多くなり、効果的なカリキュラム・マネジメントとなると考える。次年度以降の研究に引き継ぎたい。
- 朝の15分モジュールの実施は、週28コマに収まらない9単位時間ぶんだけであるため、朝の時間に取り組んでいるドリル学習、読書、体力づくりなどの活動への大きな影響はなかった。
- プラス15分の意欲を持続させるために、学習課題や教材・教具等に普段以上の工夫を凝らす必要がある。特に授業開始後40分を過ぎる頃に、体感的に薄れてくる集中力或いは知的好奇心を一段高める何らかの「刺激」を工夫する必要があり、教師側の負担となる。

(地域との関係の視点から)

- 15分モジュールや60分授業を実施することについて、地域は先進的な取組と理解していただき、学校行事やPTA活動の縮小についても協力的だった。しかし、一部の学校行事を削減することについては反対する意見もあった。
- 60分という授業時間を定期的に繰り返すことは、児童にとって負担が大きいのではないかとする心配の声もあった。実際の60分授業を保護者にも公開し、児童の姿を参観してもらうことで理解を得た。

(設置者(教育委員会など)の視点から)

- 都市部と異なり、地域内に学習塾や英会話教室等がないため、町が学校教育において英語学習を推進し、幼稚園の段階からALTが入って英語学習を導入していることは保護者や地域の方からも歓迎されている。町の費用負担で実施している小学校6年生全員を対象とした英検 Jr. では、正答率が全国平均の85%をほぼ上回る成果をあげているとともに、同じく年1回の受検料が負担される中学校の英検受検では、卒業段階で3級以上の取得者が約6割、と国の目標を大きく上回る成果をあげており、保護者や地域の方々から支持を得て、英語教育のさらなる推進を図っていく。
- 負担感のある週授業時数増加、それも小学校教員にとって不慣れで不安感の高い外国語活動の時数増加に対して、「町全体で負担を減らすための研究、多忙化解消のための研究をする」という目新しい研究テーマは、各校教職員の研究意欲を高め、新学習指導要領への意識に新たな視点を加えることができたものにとらえている。